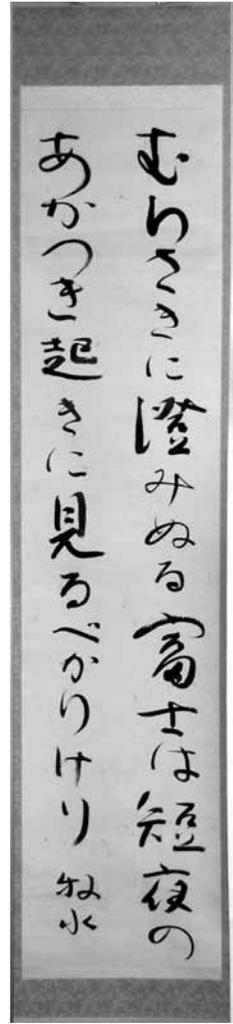


沼津市若山牧水記念館

第52号 平成26年3月15日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



むらさきに澄みぬる富士は短夜のあかつき起きに見るべかりけり 牧水

牧水はふと目覚めて時計を見た。まだ五時を少しまわったあたり、仕事もそこそこに寝てしまったむくいでもあろうか。寝なおそうかとも思ったが、朝の清涼な空気に触れたい思いに駆られて起き上った。家人はまだ寝しずまっていた。牧水は足音をひそめて玄関に向った。古い家とて床がぎしぎしと鳴ったが誰も起きない。やがて玄関を出た牧水は井戸の水で口を漱いでから一口飲み干した。喉元を過ぎる水は冷たく目が覚める思いであった。香貫の家は古かったが、敷地が七〇〇坪で、下駄をつっかけた牧水はその庭を巡るようにして門口に向った。古い門柱をくぐると、そこに内膳堀用水が滾々と流れ、その先に、狩野川が黒い流れをみせていた。

夜が明けようとしていた。箱根の山が薄明るく浮き上って見えた。そして牧水は、北の空に肅然と聳える富士を見た。「ああ」と自然に声が出た。愛鷹山から呼子岳への稜線を踏みしだくばかりに富士は厳然と浮き上って見えた。

ていた。

以上は、この歌から思い描くある日の牧水の姿である。大正十年、牧水満三十六歳の夏、沼津へ来た二年目の夏の朝の歌であり、第十四歌集『山桜の歌』に収められている。「山桜の歌」は大正十二年五月の刊行。

「富士は犯すものに非ず、仰ぐもの」の思いはこの時の思いかも知れぬ。後に九州から北海道まで旅をし、北海道では炭坑にまで入った牧水。更には、朝鮮半島の金剛山にまで登った牧水が、結局一度も富士に登っていない。その根元がここにあったのかとも思われる。

なお、この半切は、昭和五十二年九月に本会が牧水没後五十回忌を記念して、沼津史談会、沼津市教育委員会と共催して富士急百貨店で開催した「牧水展」に持ち主からお借りして展示したものであり、このたび、本会の所蔵となった書体は、一氣に書いていながら、どこか真面目で真剣な趣が感じられる。誰かに請われて書いたか、沼津での半切頒布会の折の作品かとも思われる。いずれにしても、牧水のある日の感慨が、こうして沼津牧水会の所蔵品になったことを喜びとして紹介を終りたい。

(須永秀生)

半面を陽光に照らされ、宝山あたりまでを光らせながら、富士は明けやらぬ空に、むらさき色に澄み渡って聳えていた。牧水はしばし声もなく富士を見上げていた。富士は莊嚴に、清澄に牧水を迎え

若山牧水『桜・酒・富士』と窪田空穂 大下一真

『桜・酒・富士』は、牧水の十三回忌の法要の記念に編まれ、旧知の人々のもとにも届けられた。この著について窪田空穂は、刊行された昭和十五年の「短歌研究」十一月号に、「若山牧水の『桜・酒・富士』という長文を寄せている。

筆者は第十六回（平成二十三年）若山牧水賞を受賞し、その受賞記念講演では「若山牧水と窪田空穂」と題して、近代短歌に大きな足跡を残した二人の歌人の関わり、就中、八歳年長で歌壇にも先輩であった空穂が、いかに高く牧水を評価し続けたかを語った。



朝酒一杯の後の陶然としている牧水
(大正12年3月)

詳細は『第十六回若山牧水賞記録集』をご覧いただきたいのだが、その中で、酒に関わる一つのエピソードを紹介した。ここでは「牧水の二度の訪問」という空穂の文章を引く。時は大正二年（一九一三）のある日、頼みごとがあつて訪ねて来た牧水との会話である。

「それはそうと、君はまた、何だつてさかんに飲むんです」

若山君は急に陰鬱な、泣き出しそうな顔になった。そして改まった口調で、

「そう言わないで下さい。実はぼくは、朝起きると、陰気な、さみしい、どうにもやり切れない気分になるんです。何かしようと思つてもできないんです。それで一杯飲むんですが、飲むと初めて普通の気分になれるんですから、好きで飲むというんじゃなくて、仕方なしに飲むんですよ」

「そうですかねえ」
と、今度は私が心からの嘆息をしたのであつた。

「飲むと初めて普通の気分になれるんですから」という、牧水の酒についての貴重な証言が、空穂によって引き出されている。文中の空穂の「今度は私が心からの嘆息」というのは、それに先立つ次のような話による。

「私は、まるつきり飲めないんです」

「そうかなあ！」

と、若山君は、力をこめて言つて、嘆息をした。それがいかにも真率であつた。

「私は、まるつきり飲めないんです」は空穂。酒なしではいられない牧水は空穂の「まるつきり飲めないんです」に嘆息し、空穂は牧水の「飲むと初めて普通の気分になれるんです」に嘆息している。つまりは、酒飲みと下戸との、畢竟は折り合ひぬ話なのである。

* * *

前置きが長くなつた。『桜・酒・富士』に寄せた空穂の文章の中から「酒」について記すのが、本稿の趣旨である。

「桜」「酒」「富士」それぞれについて所懐が述べられている中で、「酒」には一二〇〇字ほどの文章と、その末尾に二十九首の作品が引かれている。ここでは便宜上、文章を分解



窪田空穂(昭和28年 自宅にて)
(窪田空穂記念館 提供)

分析し、それに見合いそうな作品を適宜に引くことにする。

古来、酒に関係を持った歌は、必ずしも少くはない。人間と共にあつた酒であり、酒には歌は付き物であつたから、そのあるのは当然である。上代の神事としての御酒に伴ふ歌を除くと、歌は単に酒興を添へる為のもので、生活にはかかはりのないものであつた。大伴旅人の讃酒歌の系統のものは、比較的生活に近いものであつて、これとて社会を逃避する方便のもので、酒を通しての憂国の歌なども、方向はちがふが同じ物である。牧水の酒の歌は、純粹に酒その物を対象とし

たもので、その他の何物をもまじへないといふ特殊なものである。しかも三百首の多きに上つてゐる。恐らく古来の一人者であらう。

酒と文学、和歌についての歴史的な考察から、空穂は筆を進める。国文学者たる所以である。そしてその上に立つて、「牧水の酒の歌は、純粹に酒その物を対象としたもので、その他の何物をもまじへないといふ特殊なものである」と、位置づける。しかも、酒の飲めない空穂には、三百首という数は驚異的という他なかつたようだ。

牧水の酒の歌を読むと、初めはもとより嗜好品としてであるが、その境は間もなく超えて、酒は生活の必需品となつてゐる。酒なしには其の生活は持続の出来ないものとなつてゐる。牧水と酒との関係は、明らかに宿命的なもので、酔といふことは、牧水に取つては、生活の重要な面となつてゐることを思はせられる。

嗜好品から必需品となつてゐるようだと、空穂は書く。そして、酒と牧水の関係は「宿命的」とまで言つてゐる。

酒の香の恋しき日なり常磐木に秋のひかりをうち眺めつつ

時をおき老樹の雫おつること静けき酒は朝にこそあれ

ひとと戸をさしかたむべき時の来て夜半をたのしくとりいだす酒

居酒屋の檜火のけむり出でてゆく軒端に冬の山晴れて見ゆ

とろとろと檜火燃えつつ煙たちわが酒は煮ゆ煙の蔭に

朝日かげさし入りて部屋にくまもなししみじみとして酒つぐわれは

例えばこういう歌だろうか。「酒の香の恋しき日なり」と歌い出している作品の季節は「秋のひかり」の頃。「居酒屋の檜火のけむり」の作は、「軒端に冬の山晴れて見ゆ」という頃。探せば春も夏もあるう。いつでも酒には佳き季節なのである。そして、「静けき酒は朝にこそあれ」「しみじみとして酒つぐわれは」は朝の酒「夜半をたのしくとりいだす酒」は夜。四季も問わず、昼夜も問わないのである。さらに「ひとと戸をさしかたむべき時」の歌が日常ならば、「とろとろと檜火燃えつつ」は旅



『櫻・酒・富士』（昭和15年9月新声閣刊）と函

での歌。つまり、家にあれ旅にあれ、空穂の言葉を借りれば、「酒は生活の必需品となつてゐる。酒なしには其の生活は持続の出来ないものとなつてゐる」ということである。

私は酔中の趣を解し得ない者であるが、歌によつて見ると、牧水の酒は牧水に限られた特殊な趣を持つたものではないかと思はれる。

空穂はこのように述べて、さらに具体的に「牧水に限られた特殊な趣」について言う。

牧水はただ独りでゐることを喜び、時には、独りでゐると我ながら我を尊く感じるといつてゐる。その心は、必然的に酒に延長する。そして、微酔を帯び来ると、それと共に心が伸びて来て、生き甲斐を感じて来るのである。この心の伸び、生き甲斐を感じる時に、牧水は或る悲しみを感じて来、そして飲む酒も畏みて飲むといふ心を持つのである。即ち酔は牧水をして放漫なものとならしめず、却つて悲しませて来るもので、そしてその悲しみがやがて生き甲斐を感じさせてゐるやうである。言ひかへると牧水は、酔ふことによつて本来の自身に立ち帰り得るかのやうである。この心的状態を、最も有力に物語つてゐるのは、牧水の酒に籠つてゐる沈痛味である。牧水の酒の歌は、桜や富士の歌に見る明るさとはちがつて暗さがある。暗い中に時に鋭く閃めき出づるものがあつて、その感を深めてゐるのでも察せられる。

引用がいささかならず長くなつてしまつた

ようだ。分けながら見ていこう。

「牧水はただ独りでゐることを喜び、時には、独りでゐると我ながら我を尊く感じるといつてゐる。」というくだりである。「その心は、必然的に酒に延長する。そして微酔を帯び来ると、それと共に心が伸びて来て、生き甲斐を感じて来るのである。」と続ける。

一しづく啜りては心をどりつつ二つ三つとは重ねけるかも

独りなれば躬ながらわれの尊くて居つたちつ酒を焚きたぎらかす

足音を忍ばせて行けば台所にわが酒の壘は立ちて待ちをる

「独りでゐると我ながら我を尊く感じるといつてゐる。」には、「独りなれば躬ながらわれの尊くて」が照応するだろう。「一しづく啜りては心をどりつつ」台所にわが酒の壘は立ちて待ちをる」の心躍りは、空穂の言う「微酔を帯び来ると」の境であろう。いかにも楽しそうではないか。

空穂はさらに「この心の伸び、生き甲斐を感じる時に、牧水は或る悲しみを感じて来、そして飲む酒も畏みて飲むといふ心を持つのである。即ち酔は牧水をして放漫なものとな

らしめず、却つて悲しませて来るもので、そしてその悲しみがやがて生き甲斐を感じさせてゐるやうである。」と言つてゐる。作品としては次のようなものか。

盃をおかば語らむ言の葉もともにつきなむごとく悲しく

なにげなく聞きぬし雨のいとどしく降りひびくかも酒尽くるころを

われはもよ泣きて申さむかしこみて飲むこの酒になにの毒あらむ

酒は楽しく、それが尽きるのは寂しいと牧水は歌う。哀歎はあぎなえる繩の如きものようだ。そして静かな酔いに聞く雨音は、生きてゐることを実感させてくれる。「酒になにの毒あらむ」と、かしこみながら飲んでゐる牧水である。そしてこれらの作品の通奏低音として、空穂の言う「酒に籠つてゐる沈痛味」がたしかにある。

酔が深くなつた牧水は、我にもあらずへらへらと笑ひ、天地の揺らぐと共に踊り出してゐる。ここに思はせられることは、此の泥酔中の心理を的確に捉へ、その際の自身の状態をも捉へて、自然物

を扱ふが如く歌にしてゐることである。

これは恐らく醒めての時の作であらう。醒めて後、泥酔中の自身を思ひ浮べて歌とするといふことは、その状態を慕つてのものではなく、反対に、厭はしく感じてるものではないかと思はれる。泥酔の興を詠んだ歌に、一抹の暗さのまつはり来るのは、その為ではないかと思はれる。

「此の泥酔中の心理」に照応するのは次の作品であらう。

くるくると天地めぐるよき顔も白の瓶子も酔ひ舞へる身も

いつ知らず酔のまはりてへらへらとわれにもあらず笑ふなりけり

「くるくると天地めぐる」「へらへらとわれにもあらず笑ふ」という酔いの境を歌つた作品は、私などには意外に見える。

白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけれ

かんがへて飲みはじめたる一合の二合の酒の夏のゆふぐれ

今さら言うまでもない牧水の酒の代表歌だ

が、このようなしみじみと味わう酒が、牧水の境だと思つてゐるからである。しかし、これら「くるくると天地めぐる」「へらへらとわれにもあらず笑ふ」も、牧水の酒の境である。否、衆人と飲むことも多かつた身は、この酔い方が珍しくなかつたかも知れない。

下戸の空穂は、こうした境を卑下するでもなく同情するでもなく、たんたと分析し、「泥酔中の自身を思ひ浮べて歌とするといふことは、その状態を慕つてのものではなく、反対に、厭はしく感じてのものではないかと思はれる。」と述べ、「一抹の暗さ」を指摘している。

……考えてみれば私も随分今までに酒を飲んで来た。恐らくは尚おこれからも飲むであらう。その従来飲んで来たのに二つの場合があつた、一つは自ら進んで飲みたくて飲んだ時と、一は他から強いられて飲んだ時とである。この後者は今後出来るだけ避けたいものと思う。身体にも悪く、第一酒に対して相済まぬ義である。

「私と酒」

誰でもそうかも知れないが、わたしは酒を飲むのに、のみたくてのむ時と、習

慣や行掛りでのむ時との二つの場合がある。この頃では前者の、のみたくてのむ領域が、大分狭められて行くようなのを感じて、内心鬱すくなからず悲しんでいる。

「酒と小鳥」

牧水の隨筆には、このような記述が散見される。「他から強いられ」「習慣や行掛りでのむ」酒は、本来は好むところではないが、牧水はいつの頃からか、「伝説の人」であった。「行掛り」で飲まざるを得ないことも多かった。意に添わねば、おのずから顔に出て来る、作品に現れて来るものがある。空穂はそれを見逃していいのである。

「身体にも悪い」などと言いながら、しかし「他から強いられ」て飲むことには、牧水自身にもいささかの責任はある。空穂が引いた作品でまだ紹介していない何首かを並べれば、それが理解されるであろう。

酒やめていのち長めむことはかりするといふことのおもはゆきかな

酒やめむそれはともあれながき日のゆふぐれごろにならば何とせむ

飲む酒を止めなばこの身強くならむともふころかなしかりけり

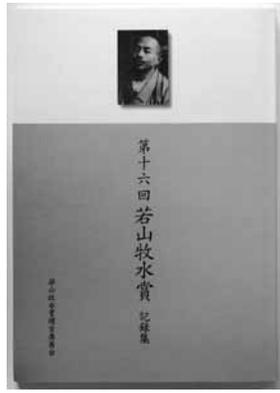
「身体にも悪い」と言いながら、やめることを進言されながら、それは「おもはゆき」と逃げ、「ながき日のゆふぐれごろにならば何とせむ」と、積極的ではない。進められれば盃をついつい重ねることになる。結末はご存知の如くである。

* * *

以上、若山牧水『桜・酒・富士』への窪田空穂の評言を紹介した。牧水論の断片でもある。下戸の空穂の下戸なりの視点の面白さを読んでいただけたら幸いである。



『牧水 酒のうた』(本会刊)



『第十六回若山牧水賞記録集』

【参考資料】

窪田空穂『若山牧水の『桜・酒・富士』』(「牧水の二度の訪問」)、『窪田空穂全集』(第十一巻 角川書店)／若山牧水『私と酒』『酒と小鳥』(『若山牧水随筆集』講談社文芸文庫)／『第十六回若山牧水賞記録集』(若山牧水賞運営委員会事務局)



【筆者プロフィール】おおした いっしん

昭和二十三年 静岡県賀茂村 宇久須(現 西伊豆町)生れ。駒澤大学 仏教学部卒。鎌倉瑞泉寺住職。昭和二十九年「まひる

野」入会。現在編集委員。第三歌集『足下』で第三十二回日本歌人クラブ賞(平成十七年)、第四歌集『即今』で第十四回寺山修司短歌賞(平成二十一年)、第五歌集『月食』で第十六回若山牧水賞(平成二十三年)をそれぞれ受賞。そのほか、歌集に『存在』『掃葉』『草鞋』、評論・エッセイに『山崎方代のうた』『方代さんの歌をたずねて―芦川・右左口編』『方代さんの歌をたずねて―甲州篇』『方代さんの歌をたずねて―放浪篇』。平成二十五年十月に開催した第六十回「沼津牧水祭短歌大会」の講師。

第二十四回

中学生短歌コンクール



第60回沼津牧水祭・碑前祭での表彰式
平成25年10月20日(日)

第二十四回「中学生短歌コンクール」に市内十五校から一七五四首の応募があった。入選歌五十一首を選ぶのは苦しい作業であった。十月二十日の碑前祭は、あいにくの雨で、会場を沼津市若山牧水記念館に移したため、本コンクール特選歌十首の表彰式も記念館のラウンジで催された。寸評を述べて見よう。

以前より小さくなった祖生そおの祖母年輪ねんりんむ微笑み変わらず 山崎優日(第四中)
祖生は山口県にある地名。遠く訪ねて会った祖母が小さくなったとおしむ。ほほえましくて温かい場面が表出された。

バーを背に背面跳びで仰ぐ空達成感とほとばしる汗 原 彩錦(第四中)
背面跳びに成功。臨場感が伝わる。辛かった練習の日々が「仰ぐ空」で凝縮された。

日常にうれしいことがなげなく落ちていくかも見つけてみよう 加藤愛海(暁秀中)

しあわせは遠くにあるものではない。日常の中にこそ、ささやかでもあるはずだとする作者に声援を送りたい。心のありようが素敵。

下界でのさわぎをよそにそびえたついつものようにかわらぬ富士が 市川吏生(第四中)

富士山が世界文化遺産に選ばれた時事詠である。近くに住むものならではの親しさで、ほこらしげに富士山の讃をうたいあげている。

会話とはキャッチボールと言うけれどどうなる母の井戸端会議 加藤正樹(片浜中)

ふと耳にした母たちの井戸端会議に誰かが一方的に話しているのだろう。これは「会話ではない」と可愛い批判である。

振り抜いた手首に残る感触が「ナイスシヨット」と響く掛け声 片桐悠成(金岡中)

手応えが確かにあった。同時に掛け声を聞いた、その一瞬をすかさずとらえてことばに表わしたのは見事である。

部活へと急ぐ頭上に鳴り響く暑さを煽り降る蟬時雨 渡辺涼未(今沢中)

この暑さの上に蟬の声が暑さを増幅して降ってくる。それでも部活へ急がねば、「暑さを煽り」という語句を探し得たのは手柄であった。

「また明日」手を振る君の背中ごし沈む夕日も別れを告げる 永田莉乃(暁秀中)

君と明日を約して夕べを別れる。絵画的でもある「君の背中ごし」のフレーズにはそこはかとない憂愁があつていい。

おつかれ様学校帰りのたつた一言いつもかかさぬ母の優しさ 居山さら(浮島中)

お母さんの何げない一言が多くを語っていることを作者は知っている。母と子の絆が快い。

ぬれた目が不思議に光る深海魚ガラスに手をあて姿に見入る 大河芽依(暁秀中)

深海魚を珍しがる作者は不思議な思いで身を乗り出す。海中深く住むことへ思いを馳せるのだろう。じつと見つめるさまが浮かぶ。

中体連や修学旅行、部活や課外活動などの作品が多い中で、さりげない日常の心のごきを平明に詠いとつた作品に、選者の票が多く集まった。

選に当たつたのは、須永秀生、杉山芳春、曾根耕一、星谷亜紀、青木朝子の五名であった。(青木朝子)

第十八回若山牧水賞に 晋樹隆彦氏の歌集『浸蝕』



(宮崎日日新聞社 提供)

第十八回若山牧水賞に晋樹隆彦(本名及川隆彦)氏の歌集『浸蝕』(本阿弥書店)が選ばれた。選考委員は佐佐木幸綱・高野公彦・馬場あき子・伊藤一彦の四氏。

授賞式は、平成二十六年二月十二日(水)宮崎観光ホテルで行われ、続いて高野公彦氏の「牧水の晩年」と題する記念講演があった。翌十三日、晋樹隆彦氏による「自然の力 牧水の感性」の記念講演が延岡市の「カルチャープラザのべおか」で行われた。

晋樹隆彦氏は昭和十九年千葉県野栄町(現匝瑳市)生れ。法政大学文学部卒。同三十七年に「心の花」入会。同六十年「ながらみ書

房」設立。平成元年に月刊「短歌往来」を創刊。歌集に『感傷賦』『天心に帆』『秘鑰』。エッセイ集『歌人片影―出会いの風景』『短歌往来』で編集長インタビュを纏めた『インタビュ―現代短歌』がある。

受賞に際し、晋樹氏は「編集業を何十年も続け、賞を贈る側だった自分が贈られる立場になり、とても驚いている」と語っている。

晋樹氏の故郷は、国内有数の景勝地である九十九里浜に面している。その変わらない心の原風景だった海岸線が消波ブロックや突堤によつて変貌した姿を目の当たりにして、「浸蝕」が生活のあらゆる場面で進んでしまっていることに改めて気づいたという。

選考委員の各氏は以下のように評している。佐佐木幸綱氏は、最近の短歌は生活のにおいて感じさせない着飾った言葉の短歌が多いが、この歌集は、「古里」「編集者」「交友」「酒」を柱として見栄えを気にせずに歌っており、生活感や作者の体臭を感じさせる。高野公彦氏は、暗くつらいテーマが多いが、全体的には読んでいて楽しいと感じる歌集だ。馬場あき子氏は、何をやっても反応の少ない現代の

中で、最後の無頼派としての誇りを持って歌っていたところ、ものを見る目の獨自性が生まれている。伊藤一彦氏は、生き方をしみじみと感じさせ、憂いと同時に怒りの歌集と言える。

晋樹氏の自選十五首から十首を紹介する。佐原を過ぎ香取を過ぎて吹くかぜは大利根川の秋のはこびや

六十数キロの長浜をおもい浸蝕をおもい蓮沼を過ぎ茫茫たりし
稜線のみはるかすまで秋雲の冷氣するどくたなびきており

どの誌面も口語のうたのはびこりぬこれ
も浸蝕のことばの時代
「飲みながら癒していきましよう」医師
のことば天の韻きのごとく聞ゆる
ふるさとの砂丘が今や浸蝕に消えゆくころぞ活版活字も

犬吠埼へ行ってみようか君ヶ浜を散歩しようか菜のはな咲けば
ながらみもなめろうもある白里の小さき
店に秋はふかまる

当たり馬券ポッケにいられて呑む酒の人生
はさあり極楽ごくじょう
若き日にこころやさしき無頼派と呼ばれ
しことも昨日のごとし